



衣川 官介

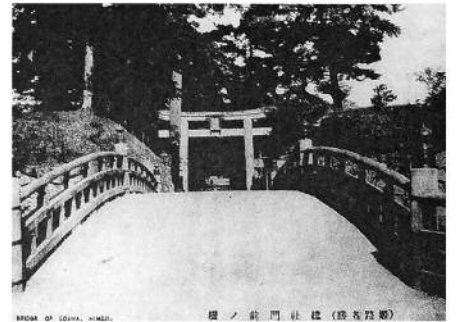
## 『総社の銅鐘』

明治時代前半（明治3年）初夏にタイムスリップして阿成村から、播州飾東郡姫路城内にある総社を目指します。距離は一里（4 km）ほど、若者の足では半刻（はんとき＝約 1時間）もかからないでしょう、早起きした若者は市川の右岸を北上します。土手に出ると正面、真北に『姫路城』が見えます、すぐ左に『早川神社』が、植木を過ぎると松並木が続き田んぼが青くざわめいています。東は松が繁る川原の向こうに滔々と水の流れる川、頂が平に削られた国府山が迫っています。黒田官兵衛が姫路城を秀吉に譲り、この山頂の城に移ったと伝えられています。

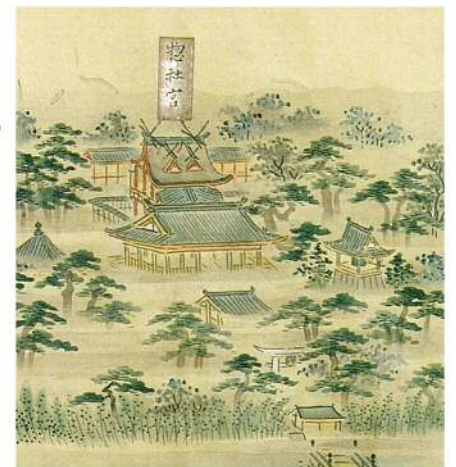
阿成村黒石からは坂を下り、小川に添って歩き『北条天満宮』の鳥居が目に入りました北条村です。残りの道のりは半分以下になり若者は鳥居の側で一休みし、その後、松林の続く道を総社に向かいました。中堀に掛かる太鼓橋の向こうに大きな御影石の鳥居が見えてきました。石鳥居は、慶安5年（1652）藩主榊原忠次が寄進したものです。明治になってから、庶民も自由にくぐれるようになったのです。『生の松原』と言われた松並木の中、石畳を歩き南神門に着きました。射楯大神と兵主大神の二柱を祀る本殿の前でこの若者は何を願ったのでしょうか。

文化10年（1819）～天保4年（1833）に描かれたと考えられる『姫路城絵巻』には鐘楼が描かれています。（部分使用）銅鐘は、この鐘楼に吊られていたものでしょう。姫路市の文化財に指定されている、この銅鐘は形態の美しさもさることながら、津田村の鋳物師（大工津田村内記石根丸、小工内記四郎左衛門）が制作した現存唯一の在銘鐘であり、播磨国総社に対する信仰のあり方を示すもので、地方史的にも重要な文化財である。永正3年（1506）置塩城主赤松義村（御屋形様）が大願主となり、両目代名主地下人が本願となって制作されたもの。

大きさは、総高 115.6cm、口径 68.8cm、口縁部の厚み 8.0cmで、竜頭（りゅうず）は三山形と言われる播磨地域でよく見かける形です。今月号を書きながら疑問点が『ふつつと』湧いてきました。射楯大神のこと兵主大神のこと、今はない地名津田村・国衙庄・しかま等のこと、そこの住んでいたと思われる鋳物師達のこと。来月号以降に記していきます。



鳥居先橋



姫路城絵巻



総社の銅鐘

永正三年 寅丙 十一月二十日	(第二区) 大工津田村内記石根丸 小工内記四郎左衛門	本願 長元久 元佐 久利 俊秀 長源 祐重	(第一区) 播州飾東郡国衙村推鐘 大願主御屋形様 両目代名主地下人

参考図書 姫路城下 うちまちものがたり  
白鷺中学校区地域夢プラン実行委員会 2006年 3月  
播磨国総社 射楯兵主神社史 平成8年7月  
姫路城絵巻 (関西学院大学付属図書館所蔵) (部分使用)

「鉄のふしぎ博物館」  
来て！見て！ふれて！ ふしぎ体験